

## ～理想の音を求め続けて～ 安倍圭子氏とヤマハのあゆみ

自身の音楽を表現できる楽器を追い求め、そのパートナーとして 1969 年に安倍氏が選んだ楽器メーカーがヤマハでした。

ここでは安倍氏がヤマハとともに歩んで来られた楽器開発の歴史をご紹介します。

「民族楽器やポピュラー音楽の楽器としか認識されていなかったマリimbaを、ピアノやバイオリンのようなソロとして表現できる楽器にしたい」その思いを持ち、マリimbaの楽曲をご自身と著名な作曲家とで創り出す中で、安倍氏はその高い芸術性を満たすための楽器開発の必要性を常々感じておられました。安倍氏が要求する“マリimbaの音”。それは高音はクリアで低音はあたたかく豊かに響き、音程は正確でダイナミックレンジが広く、コンサートホールの隅々にまで届くサウンド、というものでした。コンサートホールでコンチェルトを演奏するときに、バックのオーケストラに負けないパワーを持つマリimbaは、当時まだ世にありませんでした。そこで安倍氏は当時のヤマハ社長、川上源一に面会を申し入れ、共同でマリimbaを開発することを提案、川上はそれを受け入れ安倍氏とヤマハのマリimbapプロジェクトがスタートしたのです。



YM-4500



YM-5000



YM-5000 のレゾナンス・レギュレーター。温度・湿度のわずかな変化に対応できるこの仕様は、現行品の YM-6100 にも受け継がれています。

当時のヤマハには教育用マリimbaしか無く、本格的なコンサートマリimbaは製造していませんでした。安倍氏の助言により様々な研究・試作を繰り返し、ヤマハとして最初のコンサートマリimbaである YM-4500 の設計を完了させたのは 1971 年。当時のマリimbaは最大 4 オクターブまでしかなく、YM-4500 も同じ音域でした。YM-4500 はプロジェクト第一弾の楽器として十分な完成度でしたが、安倍氏は現代音楽における表現力を広げるために、音色の改善と低音域への拡大が必要であると感じておられました。

その思いを受けて、開発チームはただちに新たな試作に取り組みました。YM-4500 とは異なる音板サイズと倍音構成を持ち、共鳴パイプの響きを 1 音ずつ調整できる機能を加え、音域の拡大だけでなく音色の改善も図りました。また、この試作からは人間の音感特性に合わせた調律カーブ（低音域はやや低めに高音域はやや高めに調律する仕様）を採用しました。その結果、現代音楽のレパートリーに適した透明感のあるピュアな音色と、鋭いフレーズの切りこみを生かせる楽器となり、それは 1973 年に 4.5 オクターブマリimba YM-5000 として結実しました。

ヤマハコンサートマリimba 開発年表

| 年代    | 品番            | オクターブ | 音域      |
|-------|---------------|-------|---------|
| ～1971 | YM-400        | 4     | C28-C76 |
| 1971  | YM-4500       | 4     | C28-C76 |
| 不明    | 同低音部エクステンション付 | 4.5   | F21-B27 |
| 不明    | 同低音部エクステンション付 | 5     | C16-B27 |
| 1973  | YM-5000       | 4.5   | F21-C76 |
| 1981  | 同低音部エクステンション付 | 5     | C16-C76 |
| 1984  | YM-6000       | 5     | C16-C76 |
| 2002  | YM-6000A      | 5     | C16-C76 |
| 2008～ | YM-6100       | 5     | C16-C76 |

楽器の発展とともにマリimbaのレパートリーを拡大していく中で、安倍氏の音楽的要求はマリimbaの特色がより生かせる低音域へと向かいました。さらに豊かで重量感のある低音域を持つ楽器に発展させたいという要求から、当時の開発チームは 5 オクターブへの拡張を目指し様々な研究を重ねていきました。そこで彼らは、すでに完成していた YM-4500(4 オクターブ) や YM-5000(4.5 オクターブ) の低音域に装着するエクステンションユニットを試作し、5 オクターブマリimbaとしての可能性を検証していきました。1981 年、安倍氏はエクステンション付の YM-5000 でアメリカツアーを行い、各地で非常に高い評価を得ることができ、チームの検証は成功裏に終わりました。



奏者目線から見た  
1 オクターブのエクステンション付 YM-4500



YM-4500 の  
エクステンションユニット



1981 年のアメリカツアーでは検証のため  
エクステンション付 YM-5000 を使用。  
出典：『安倍圭子 マリimbaと歩んだ音楽人生 -A VIRTUOSIC LIFE-』  
(ヤマハミュージックメディア)



世界初の 5 オクターブコンサートマリimba

YM-6000

YM-6000 の設計思想を受け継ぎ  
デザインを一新した現行品

YM-6100



その後 YM-6000 に高さ調整機構を追加した YM-6000A を 2002 年にリリースし、2008 年には現行モデルとなる YM-6100 が誕生しました。YM-6000 のシンボルであったツートンカラーを継承し、白い塗装部分は木の温もりを感じさせるナチュラル色の木地塗装に変更、派生音の低音域の共鳴パイプを外側（聴衆側）へ出して、レゾナンス・レギュレーターを調整しやすくしました。また長棒と共鳴パイプを軽量化し、YM-6000A に比べて 10kg 減らすことに成功しました。YM-6100 は、これまで認知されてきた YM-6000 のサウンドやイメージを継承し、さらに可搬性や機能面も向上させた安倍氏とヤマハの集大成モデルとなりました。

1969 年に安倍氏がヤマハを初めて訪問されてから、実に長い年月が流れました。安倍氏の追求心から世に生み出されたクラシック音楽用 5 オクターブマリimbaは、現在コンサートマリimbaとして世界中で定着しています。マリimbaの芸術性を高めるため、安倍氏がパイオニアとして歩み続けてこられた音楽・マリimba人生に、同じ日本人として、そして日本の楽器メーカーとして携われたこと、数々の感動のシーンにはいつも私たちの楽器があったことに心から感謝しております。